序　文

内田康夫先生が本年度で退職される。長年にわたる内田先生の広汎な教育・研究活動にたいして、ここに心より敬意を表すとともに、本学に就任された経済学部発足以来のご厚誼に切に感謝申し上げたい。

内田先生は、長年、環境生物学の科目を担当されている。人間・野生生物と地球環境のかかわりをテーマとしている先生の活動は、文字通り広く大きい。当然のことながら、教室の授業だけにとどまらない。教養演習や専門演習の学生を各地に野外観察・野外実習に引率されている。毎年夏、伊豆諸島へ学生を連れて行って合宿しているお話は、十数年前からうかがっている。

私が思い出すのは、十年ほど前、大学の共同研究で、内田先生をはじめメンバー６、７名で、伊勢志摩に2泊3日の研究旅行に行ったときのことである。伊勢神宮を訪ねた折には、神社の周辺に保存されている原生林に入り、植生や鳥類など自然環境について説明していただいた。また水族館では、珍しいさまざまな熱帯魚や回遊魚についての先生の説明に耳をかたむけていると、さながら先生の知の海に回遊しているような快さに浸ることができるのであった。先生はまた食べるのも大好きで、昼食にイセエビを頼んだときの写真には、先生の喜々とした笑顔が写っている。

大学や飯能周辺にかぎっても、内田先生は学生や一般の方々を引率されて、四季折々の自然観察の貴重な経験をうる機会を提供されている。私たちはその余滴を『大学ニュース』連載の「大学生物ごよみ」で触れることができる。実にこの連載は100回に及んでいる。このようなかたちで先生の活動の一端をうかがうことができるのは、私たちの贅沢であることに、私たちはあまり気づいていないのである。

内田先生は、環境生物学者、鳥類学者として数々の専門的な業績をお持ちであるが、おそらく何々の専門と決めつけられるのは不本意と思われているのではなかろうか。先生の学問、知は、狭い自然科学的な知識を超えている印象がある。もちろん、自然科学的な厳密な方法・統計も重視されているが、そのうえに知の喜びにあふれる博物学的知、本草学的な知が醸し出されている。その観察・記録・把握の活動は、私たちが考えている以上に広い。ひそかに忖度するに、西行や芭蕉のような歌人・俳人を尊敬し、先人の旅路に思いを馳せながら、先生固有のしかたで、古今の自然と対話しているのではないだろうか。

動植物などについての私の素人質問にも、内田先生には気軽に応じていただいた。学内で遭難した鳥を何度も介護し、無事恢復させている先生の経験談は実に楽しい。いつか語られた、小さな鳥もやはり人を見つめるときは、その顔を、目を見るのですよ、と説明されたとき

の先生のやさしい、楽しそうな目が私たちの目に浮かんでくる。

ところで忘れてはならないことであるが、大学内の運営においても、内田先生は次々に要職を務められた。1990年代なかば、一般教育協議会で大学評議員を務められ、当時の法学部・経済学部からの現代文化学部の創設と教養文化研究所の設立という重大な時期に活躍された。教養文化研究所の初代所長に就任し、当研究所の活動の礎を築かれた。また学生部長にも就任され、学生生活の充実に尽力された。研究・教育活動をお続けになりながら、学務にも大いに貢献していただいた日々に心より感謝申し上げたい。

この3月で特任教授はおやめになるが、講義や教育活動、野外活動はお続けになると聞いている。思えば、沖縄諸島から北海道まで、空、山、平野、川、海にわたって総体的、ダイナミックな関心をお持ちの先生である。鳥類から、動植物、海洋生物まで、もともと陸海空を自在に“侵犯”する内田先生に、肩書きは関係ないのである。今後とも先生の精力的な活動に触れることができるのは、このうえない喜びである。

2007年3月

教養文化研究所長　本間邦雄